

住民から来島者まで

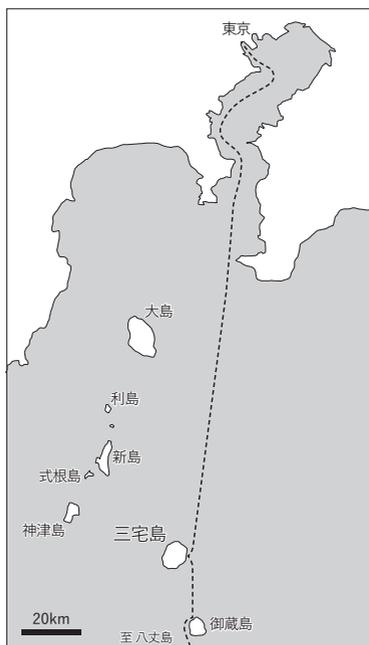
多様な体験プログラムの提供

すべてが体験型観光の三宅島

東京都心から南へ約一八〇キロメートルに位置する三宅島。面積約五・五平方キロメートルと、山手線内と同程度の広さを持つ円形のこの島には、かみつき神着・伊豆・伊ヶ谷・坪田・阿古の五つの集落が点在し、二一三三人（令和七年二月末日）の暮らしがある。二〇〇〇年六月、島の中心に聳える活火山・おやま雄山が噴火。それに続く火山ガスの噴出により全住民が島外避難し、約四年半におよぶ避難生活のちに帰島、復興を果たした島としても知られる。

自然環境に恵まれ、国指定天然記念物のアカコッコが観られるなど、かねてよりバードウォッチングの聖地として有名なほか、磯釣り、ダイビングなどのスポットも多く、まさに体験型観光の資源（ポテンシャル）を有する島だといえる。

実際に、一般社団法人三宅島観光協会の谷井重夫事務局長は「三宅島の観光客は、すべて体験型観光を目的に来島して



いると考えている」と話す。観光協会では観光客への宿泊あつせんを行っており、その際にお客さんの行動予定をヒアリングしているが、「〇〇を体験したい」といった目的を持って来島している方が多いという。

大阪出身で大手電気機器メーカーに勤務していたが、旅行好きなご夫人が三宅島の第一回「島ぐらし体験事業（移住体験

プログラム」に申し込み、それに参加したことがきっかけで島に移住したという谷井事務局長も、自身の実体験として「三宅島では本土に住む人々にとつての《非日常》を体験できる」と、語る。

ジオツーリズムと島内周遊の推進

三宅島は、これまでも野鳥やマリンアクティビティを目当てに訪れる観光客は多かったが、近年では、火山活動によって生み出されたダイナミックな景観を巡ったり、火山防災学習を目的とした来島者も増えてきている。そこで観光協会では、島内のジオサイトを回ったり、ジオトレッキングを楽しむ観光客に向けた「三宅島ジオMAP」、防水加工を施した「MIYAKEJIMA guide book」を作成、頒布・公開を行なうなどジオツーリズムの推進に取り組んでいる。

また、二〇〇〇年の噴火以降、山頂への立ち入りが禁止されていた雄山にガイド付きで登山を行なう「雄山火山体験入山775ツアー」を、東京都および三宅村の許可を得て二二年から開催するなど、三宅島ならではの体験の提供にも力を



一般社団法人三宅島観光協会の谷井重夫事務局長。

入れている。

谷井事務局長は、「雄山の体験入山は、『火山防災学習』の一環という位置づけ。都および村から許可をもらい、観光協会を窓口を実施している。ツアーには、都の認定の自然ガイドが同行し、入山に際してはヘルメットの着用、ガスマスクの携帯などを事前にレクチャーした上で、動植物の説明をしながら登山する。最少催行人数を設けてはいるが、受付を開始すると定員いっぱいでの申し込みがある状態」と、今後の継続に意欲を示す。

このほか、来島者に島内を周遊してもらうために、



1983年の山腹割れ目噴火の溶岩原を歩くことができる、阿古地区の火山体験遊歩道。

観光協会では二〇一七年よりレンタサイクル事業を開始している。三宅島の住民は、自家用車での移動が基本なため、島内にサイクリング文化がなく、当初は同事業を行なう意義がなかなか理解されなかったという。しかし、実際に始めたところ若い観光客を中心に高い人気を得ており、現在では観光協会の収益事業の柱の一つになっている。

島内に自転車屋さんがないためメンテナンスなどが行き届かない、自転車を屋内に保管できる宿がないなど課題は多々ある。それでも、自転車を活用した地域づくりは、今後も力を入れていきたい取り組みであり、住民の方々の理解や協力を得ながらサポートステーションを設けていくなど環境整備に努めていきたいと、谷井事務局長は話す。

多様な体験型メニューの提供による リピートの循環づくり

近年、三宅島では陸上から鯨が観察される機会が増えており、それに合わせてホエールウォッチングや研究を目的とする来島者も増加している。観光協会では、住民や観光客からの目撃情報を収集し、SNSなどで即座に発信しており、利用者（SNSのフォロワー）からは、「配信された情報をみてすぐにその場まで移動することができ、非常に役立つっている」

など好評を得ている。島の規模が大きくないため、SNSの情報を確認してからでも、目撃場所まで短時間で移動できることが、三宅島の強みである。

研究者の来島も多く、尾びれをAI解析して個体を識別し、その結果を小笠原および沖繩の研究者と情報共有することで、鯨の回遊状況の把握に役立てているという。

これらの自然面の資源に加え、三宅島は、御祭神社神事（都指定無形民俗文化財。詳細は「島の精神文化誌」参照）など伝統文化面での資源も有している。例えば、島内には延喜式内社に記載されている神社が一二社あるが、それ以外にも五百〜六百もの神社・仏閣が存在しており、それらを観光に活かせる可能性もある。しかし、「地域で継承してきた祭祀などを観光化してしまうことに慎重な声もあり、まだまだ検討が必要な段階。特に三宅島は、無形文化財や神社・仏閣などの記録が火山噴火のたびに消失している面もあり、資料が少なく、ガイドができる人材も少ない」と、谷井事務局長は説明する。

このほか、島内には郷土資料館をはじめ自然観察施設の「アカッコ館」、温泉施設「ふるさとの湯」、日本最大級のボルダリング施設「三宅村レクリエーションセンター」など多くの観光施設が整備されている。

「コロナ禍以降、さまざまな体験型コンテンツを打ち出し選択肢を広げたことで、一泊ではなく二泊と、宿泊日数を延

ばず観光客が少しずつ増えてきている。今後は、島内の関係団体と連携し、DMO化なども視野に入れながら、稼ぐ力を強化していくとともに、多様なコンテンツを組み合わせることで、三宅島へのリピートの循環を創っていきたい」と、谷井事務局長は展望を語る。

子どもたちにこそ島の自然体験を

三宅島の体験メニューは観光客向けのものばかりではない。「身近に雄大な自然（海・森・火山など）があるのに、島の子どもたちが自然で遊ばなくなってきたことを懸念して、子どもを対象としたプログラムを始めようと考えた」と話すのは、「三宅島地域体験工房しまのね（以下、しまのね）」を運営する平野奈都さんである。

三宅島出身の平野さんは、小学生のころに海洋生物学者のジャック・モイヤー博士から学び、島の自然や生物に関心を持つようになったという。二〇〇〇年の雄山噴火時は中学三年生で、東京・あきる野市で避難生活を送り、避難解除後もすぐには島に戻らず、横浜の大学・大学院に進学した。大学院修了後の二〇一〇年に帰島し、観光ガイドの修行をしながら、島のイベントの運営サポートなどを担った。一三年から三宅島観光協会の職員として勤務していたが、スマホやゲー

ムなど遊びの多様化、全島避難を挟んだことで、幼少期に自然の中で遊んだ経験が少ないIターナーの親御さんが増えたことで、三宅島の子ども

もたちの足が自然から遠のいていと感じ、二四年に「しまのね」を開業した。

平野さんは、「以前は、親が『外で遊んでおいで』と、子どもを自然の中で遊ばせることが当たり前だった。島で生まれ育った親であれば、どこへ行ったら危ない、どのくらいの日候なら大丈夫など『安全と危険の境界』を感覚的に理解していたし、地域の方々も見守ってくれていた。三宅島という場所は、自然で遊ぶことと自身が住民生活に直結している部分がある。まず島の子どもたちが自分たちの身近な自然の中で体験を積み重ねることで、自然と人・人と人とのつながりを理解することが大切だ」と話す。名称の「しまのね」には、島（地域）に根ざすという意の根と、明るい音色を奏でながら新しいワクワクを生み出そうという音の二つの想いが込められている。



「三宅島地域体験工房しまのね」を運営する平野奈都さん。

「しまのね」を立ち上げるにあたっては、学生時代に神奈川県・葉山町の「NPO法人オーシャンファミリー」の子ども向け自然体験の活動に携わった経験が役立ったという。ちなみに、当時の同法人の代表を務めていた海野義明さんは、モイヤー博士と一緒に三宅島で活動された方である。

《生きる力》を磨く、遊びと学びの場づくり

「しまのね」の事業内容は大きく「子ども・子育て世代向け野外体験事業」と「観光事業」に分けられる。

観光客向けには、トレッキングや火山防災学習、島内観光のガイドに加え、生き物観察やシュノーケリングなどのアウトドア体験を提供している。自然体験ツアーやイベントのコーディネートも行っている。従来の三宅島の体験型アクティビティには、子ども向けものが案外少ないため、ファミリー層が子どもたちと一緒に楽しめる体験メニューの整備を進めている。

観光客向けだけではなく、平野さんが力を入れているのが、島の子どもたち向けの「かまじっこクラブ」の運営である。同クラブは、島内の小学生を対象とした会員制の野外活動クラブで、年間を通して三宅島の雄大な森や海などで思い切り遊び・学ぶことで《生きる力》を磨くことを目指している。な

お、「かまじっこ」とは島の方言で在来種の「オカダトカゲ」のことをいう。

クラブは、年会費と参加したプログラムごとに参加費がかかる。主なプログラムは、一斉下校日などを利用して放課後から日暮れまで活動する「放課後野外活動（月に1〜3回実施）」、休日の九〜一五時ごろまで親子で活動する「休日一日野外活動（一回ほど）」、夏休みなどの長期休暇に一泊二日でテント泊を行なう「キャンプ」に分けられる（図参照）。

現在のクラブへの登録者数は三四人で、活動一回当たり、だいたい一五〜二〇人の参加がある。平野さんは、「会員の中には、親の転勤などのため数年だけ島で暮らす、いわゆる転勤族のお子さんも多い。たとえ島を離れても、長期の休みなどにクラブの活動に継続して参加しに来て

かまじっこクラブ 年間プログラム (予定) ※学校行事・島内行事などを避け、各学期ごとに日程を調整します。

4月 ・オリエンテーション ・春の山菜採り ・野草天ぷら ・森の生き物観察 ・巨樹ウォーキング	5月 ・GWキャンプ ・ヨモギ団子作り ・森アシレチック作り ・野菜苗植え ・トカゲのすみか作り	6月 ・漁船乗船体験 ・磯の生き物観察 ・ビーチクリーン ・果汁づくり ・ジャガイモ掘り	7月 ・海の安全講習 ・SUP・シーカヤック ・シュノーケリング 基礎編@伊ヶ谷港	8月 ・シュノーケリング 初級〜中級 @大久保浜・蛸ヶ浜など ・ 夏休みキャンプ	9月 ・シュノーケリング 中級〜上級 @釜の尻・富岡浜など ・いかだ作り ・&ロープワーク
10月 ・SUP・シーカヤック ・ドングリ拾い・試食 ・楢の実拾い ・しもん船のお手伝い ・冬野菜種まき	11月 ・サツマイモ掘り ・焼き芋・農作業 ・木の伐採・工作 ・森アシレチック作り ・楢汁ほろ	12月 ・爐づくり ・クリスマスリース ・正月飾り作り ・ハイキング	1月 ・ 冬休みキャンプ ・冬野菜収穫&調理 ・火起こし ・ハイキング	2月 ・風作り&風あげ ・ジオスポット探検 ・火山実験 ・楢の花びら染め	3月 ・タラの芽採り ・野草天ぷら ・沼澤ウォーキング ・1年の振り返り

くれるようになってもらいたい。島に関わり続けてくれる関係人口の創出につなげられたら」と話す。

また、クラブ活動を続けることの意義について、「島で将来にわたって生活していくためには、ある程度の人口を維持する必要がある。三宅島の自然の中での体験を通して、生きる力を磨くと同時に、島の良さをしっかり理解し、進学などで離れたとしても、いずれ戻ってきたいと思ってくれる子どもたちを増やしていきたい」と語る。

平野さん自身、三児の母として育児中であり、「しまのね」以外の仕事も行なっているため、なかなか活動の幅を広げていくことはできないが、今後は島外の子どもの受け入れにも力を入れていきたいという。

「現在でも、一部は島外の子どもや家族向けのプログラムを行なっているが、それをもう少し拡大していけたら。全島避難を経験している三宅島は、防災・減災の先進地でもある。こういった点も島の資源として、体験に活かしていきたい」

さらなる観光振興に向けて

上述の通り、三宅島は、釣りやダイビングをはじめとするマリンスポーツ、トレッキングやボードウォッチング、火山体験などのジオツーリズムに加え、近年ではホエールウ

ォッチングやボルダリング、サイクリングなど多様な体験型プログラムを提供している。一般的に「体験型」というと、観光客向けと思われがちだが、三宅島では地域住民も含め島内外の方々に対し、島のポテンシャルを活かした体験型プログラムを提供している点は、特筆すべきである。

現状では、自然面での体験型観光が中心となっているが、三宅島は祭祀や伝統芸能など文化面においても多大な資源を有しており、(地域の理解は必須だが)これらを観光に活用することも十分考えられるのではないだろうか。このほか、「しまぼスタンブラリー(東京の島々で使える電子通貨・しまぼ通貨と連動したスタンブラリー)」のように、同じ東京の島々、特に航路や航路(東京愛らんどシャトル。伊豆諸島間を運航するヘリコミュニティ路線)で結ばれる島々と連携した周遊型観光の提供、プログラムの充実などにも注目したい。

三宅島は、有人国境離島法の特定有人国境離島地域である。同地域の地域社会維持や推進を目的とした「特定有人国境離島地域社会維持推進交付金」には、もう一泊「してもらっための旅行商品などの造成・宣伝・販売促進などを支援する「滞在型観光の促進」事業が設けられているが、三宅島がさらに観光振興を進める上でも、令和八年度末で期限を迎える同法の改正延長の実現が求められる。

(森田)